

# 近代日本の胎動と 社会学の発達との相関関係

フランスと比較して

アンヌ・ゴノン

(大学言語文化教育研究センター助教授)

私はリヨン育ちのフランス人です。パリ大学で博士課程を修了し、かねてより憧れていた日本を訪れ、同志社大学との縁が生まれました。文学部社会学科の小倉巽二先生の指導を得て、大阪の地域研究として『釜ヶ崎』の日雇い労働者の実態調査に当たりました。幸い、一九九四年四月より同志社大学言語文化教育研究センター助教授に任じられ、現在は一、二回生を中心にフランス語を教えています。

日本の日雇い労働者の実態調査を通して様々な日本人と出会い、密着とは申せませんが彼らの生活を垣間見ることで、日本社会の断面を知ることが出来ました。何故、日雇い労働者かというのは、フランスでは彼らのような存在は極めて希で、私の興味を引いたからです。一九九五年末のフランスのストライキはパリのみならず全国交通網を麻痺させまし

たが、事の発端は大統領主唱で首相が公表した社会保障制度改悪が契機となりました。超エリート達が主導するフランス政府と一般労働者の対決には、国家対労働者の宿命的対立が象徴され、私も反対する核実験同様、人に会えば問われて窮する頭の痛い問題です。国家と個人の対立は古代から容易に解き難い命題ですが、日本が近代国家形成の礎を築いた明治時代に私は着目し、近代日本の胎動と同国の社会学の発達の相関関係を当面の研究対象と捉えています。

フィールド・ワークでは研究対象と直接する必要がありませんが、私は日本の生活習慣に抵抗を覚えず、日本式のお風呂も困りません。日本食も大好きで、お寿司、天麩羅、鰻が大好きで、納豆も食べられます。私は現在京都に住んでいます。観光地として有名な付近一帯は日曜・祭日には観光客で溢れかえり、車は

大渋滞、趣味のジョギングは日も暮れて静けさが戻る頃にしかできません。日本に魅せられ来訪した西欧人の多くが、静寂な佇まいと伝統的な家具調度に囲まれた日常生活、古来からの変わらぬ日本を愛したのだと考えますが、近年何か損なわれていくような気がしてなりません。勿論、伝統と文化的な生活はなかなか両立、共存できませんし、街灯のない暗闇の中で走るのとはとても危ないことです。十二月の最後のクラスで、学生さんに「クリスマスとお正月はどうして過ごすの」と尋ねると、「帰省せず、下宿にいる」と答える学生さんが少なからずいたのにはビックリさせられました。伝統的な日本のお正月の過ごし方が次第次第に若者に受け入れられなくなった証左と言えるかも知れません。或いは家庭の、家族の絆が薄れてきたせいかも知れません。フランスではそのような兆候は未だ

見られませんが。どんなに忙しくても両親の許に帰って家族との時間を大切にします。そんな日本の学生さんがアルバイトをしてフランスのブランド品を購入する姿を見ると、日本同様に伝統あるフランス製品が彼らに受け入れられ、愛されるのを見ることは嬉しい限りですが、フランスではブランド物は年寄りが所望するのが普通です。イッセー・ミヤケを私が好きなのは、彼の独創的なデザインがとても魅力的だからです。

伝統文化が日々息づいている京都で職を得、しかも同志社に奉職できたことはとても幸せ、光栄な事と存じます。フランス語教師としてその職責に当たる一方、恵まれた研究条件でこれからも研究を続けていこうと考えています。日本の社会学の形成の歴史と成果を十二分に把握して、ヨーロッパ、特にフランスとの比較対照が今後の研究課題となります。昨今、焼き立てのパン屋さんが日本の各地で見られるようになり、手軽にフランス・パンを手にすることが出来ることは異国に住む者にとってとても幸せなことです。フランス・パンを標榜する物の中

にはデザイン的にとっても美しく、かつ美味しいものが多々ありますが、私が故国で口にするのとは一味違うのです。善し悪しを問題とするのではなく、姿や形が似ていても微妙な風味と歯触りが違うのです。この事は学問、研究分野でも言えるかも知れません。社会学の分野では特に方法論をめぐり、外国人と日本人の間には目に見えない差違が存在するかと思えます。文化や語学という越え難い障壁が張りめぐらされている事でしようが、周到なフィールド・ワークに努め、たゆまず日仏の垣根を取り払うのがこの私に課せられた使命と考えます。

(60ページからつづく)

に日本経済についての知識を深め、それを実社会で生かせる高度の専門職業人の養成を目指している。とりわけ一般企業専門職、公務員、国際機関職員、教員、公認会計士を目指す人たちに役立つよう、実際のデータに基づいた技術的分析方法などが教授される。経済学部以外を卒業した社会人や留学生にも広く門戸を開く。  
(※経済学研究科事務室 ☎ 075・251・3520)

▼すでに94年度から「専門職コース」を設置している商学研究科では、96年度から同コース内にベンチャー企業のマネジメント、ファイナンスおよび会計・税務等の実務が学べる「ベンチャービジネス・プログラム」を開設する。(※商学研究科事務室 ☎ 075・251・3660)

これら3つの研究科の入試の詳細は各研究科事務室または入試センター入試課  
(☎ 075・251・3210)まで。

# 中国語方言と聖書翻訳事業

木津祐子

(女子大学専任講師)

同志社大学には、中国語の各種方言訳聖書のコレクションがある。これは、京都大学文学部名誉教授の故小川環樹博士が、氏の中国留学期間中である一九三五年に、上海の美華聖經会にて購入されたものを同志社大学が購入したものが中心となっており、中国語学者でもあった氏が意図的に収集されたという点で、無駄のないコレクションである。内容は、十九世紀末から二十世紀初頭にかけて主に上海や汕頭などで出版された、上海語や蘇州語、台州語や客家語など、表記は漢字やローマ字を取りまぜての、十種の漢語方言による十数冊の聖書、そしてさらに二十数種の少数民族語訳聖書によって構成されている(拙論「同志社大学蔵漢語方言訳等聖書について」『学術研究年報』45、1995)。

漢語内部の方言相互間の差異は極めて大きなものである。音韻・語彙上の違い

はもちろんのこと、文法やシンタクスの面でも異なる場合が少なくないし、互いにことばの通じないことも多い。例えば、筆者の中国留学中、こんなことがあった。雲南省の省都昆明市で同行の日本人留学生たちと食事をしていて時のこと、私たちの話す日本語に隣の席からじつと耳をそばだてていた男性の一人が、もう我慢できない、という風に私に声をかけた。「どこから来たのだ」。とりあえず「海の方から」と答えると、「上海じゃないか」と訊ねてくる。「まあそんなことだ」と私。南京に留学していた身にとって、上海は最も身近な大都市であったし、それにはるばる昆明あたりまで来てしまふと、日本まで飛行機で三時間もかからない上海は、何だか隣町のように感じるものだ。そうすると男は同席の連れに向かい、「そらみる」とばかり得意げに顔をほころばせる。振り向きざま、「おれは上

海に行ったことがあるから、ことばを聞いただけで上海人だつてことがわかるんだ。上海の南京路も歩いたぞ。人が多かつたなあ。後の方は、大都市上海の土をまだ踏まぬ友に自慢したい響きに満ちている。中国人の面子を重んずる私たちがその後ずつと上海人の振りをし続けたことは言うまでもない。ことほどさように中国語、正確には漢語内部の方言差異はすさまじい。

中国の方言分区については何通りかの考え方があり、細かく分ければ九つ、つまり、呉語・閩語・粵語・贛語・湘語・客家話・晋語・徽語、そしてもっとも広範囲にわたつて話されている官話となる。さらに、この横の多様性に、歴史による縦の変遷が加味されて、漢語史の諸相はさらに複雑となる。

ところが、中国では漢字による書記体系が長期間にわたり規範化され、漢語の

地方的差異、さらにその歴史の変遷などを文献資料の上から窺い知ることは極めて困難である。この壁を崩していくのは、やはり漢語以外の他民族語もしくは外国語との接触以外にはなく、明代、宣教師ニコラ・トリゴの手になる『西儒耳目資』<sup>1</sup>は、最初のローマ字表記による中国語発音字典として、画期的な意義を有していた。また、同じく明代には、『日本館訳語』<sup>2</sup>『朝鮮館訳語』など、中国人の手による諸外国語学習書も数多く編まれた。「華夷訳語」と総称されるものがそれである。とはいえ、これらはいわば士大夫の共通語としての官話—Mandarin—(方言区分での官話とはまた異なる概念)の歴史を映したものであつて、方言が漢語史上の表舞台に立つことは、個別的な例を除き、まず有り得なかつた。

明代、布教のため中国を訪れたマテオ・リッチらの『中国キリスト教布教史』<sup>1</sup>を見ると、彼らの当時の活動は、居住を許された幾つかの港町や皇城に限られていて、その布教対象も知識人層であつたので、知識人の共通語である官話を中心に中国語と取り組むより他はなかつたの

だが、十九世紀以降の宣教師たちは、奥地の農村に分け入り、布教対象も、文字を知らない人々へと広まった。<sup>2</sup>そして、ローマ字によるもの・漢字によるものを問わず、多くの方言訳聖書が、十九世紀中頃から数多く出版されることになる。

このような、十九世紀から二十世紀にかけての膨大な聖書翻訳事業は、漢語史研究の立場からいって、その方言地点や語料の豊富さ、表記の厳密さといった諸点で、群を抜いた功績である。例えば、

前に挙げた同志社大学蔵の上海語訳ローマ字本マタイ福音音書(一八九五年、上海美華書館、請求番号273・62B11)には、極めて珍しいことに、上海語声調の上声と去声に当たる音節に、声調符号までが付されていた。それを分析してみると、当時の上海語が既に四ないし五声調体系であつたろうことがわかるのだ。

筆者は現在、主にこれら呉語訳聖書の音系を分析しているが、ただでさえ一筋縄ではいかぬ中国という対象に、聖書という膨大な知の集成が取っ組み合っているのだから、作業は遅々として進まない。この『時報』が刷りあがる頃には、さて

どこまで進んでいるであろう。この小文は私自身のための路程標としたい。

\*1 原題Matteo Ricci, Della Entrata della Compagnia di Gesù Christianità nella Cina. その他『中国キリスト教布教史』一・二(岩波書店『大航海叢書』第二期8、9)所収の各書。

\*2 かなり時期は下るが、一九三〇年から四〇年代にかけて中国山西省で布教と教育を行ったグローター神父の記録が、彼の貴重な方言調査の成果などとともに、最近日本語に翻訳された。(W・A・グローター著 岩田礼・橋爪正子訳『中国の方言地理学のために』一九九四、好文出版)

# 野生動物の観察について

## 古本 大

(香里中学・高等学校教諭)

「私の研究」を気軽にお受けしたものの、よく考えてみると、「私の」と言えるのは学生時代のものであり、香里に就職してからは、ほとんどが「生物部と私の」であることに気づきました。これは、生物部の諸君への感謝の意も込めてまとめました。文中には、生物部が年に一度発行している機関紙「青蜂」の二四・二六・二七・二八巻から資料を引用しました。

### 学生時代

学生のころ、私は動物社会学研究室で哺乳類の研究をしていました。そして、カワソを四国に追い求めたり、タヌキを追っかけたりもしました。大阪府下のシカの生息数推定の調査で、約一か月半にわたる、徹夜でのオス個体の鳴き声の聞き取り調査もしました。

卒業研究となった、「テレメトリー法に

よるニホンカモシカの活動性と土地利用」では、秋田県がカモシカに装着した電波発信機を頼りに、山の中を歩き回り、できるだけ目撃し、多くのデータを集めました。

それまで「見ることができない」というストレスを受けていたのが、ここでは見失ってもすぐに発見でき、しかも真夜中でもどこにいたかが推定できたので、その喜びといったら言い表せないものでした。雪の積もった山の中は、山スキーを履き、尾根の向こうへ行ってしまう親子づれを追いかけては、へとへとになる毎日でした。何をしているのかと双眼鏡や望遠鏡で観察していると、何を好んで食べているのか、どこが歩きやすいのか、子を見失った母親がどれだけ懸命に探すのかということがわかってきました。また、一夫一妻が多いカモシカの社会で、一夫二妻のオスが、どれだけし

んどい思いをしているのかといったこともわかりました。つまり、カモシカでは、シカのように群れず、メスどうしも一年を通じて縄張を確保しているので、一夫二妻のオスは、一夫一妻のオスの倍の面積を繁殖期以外にも縄張として持ち、それを維持しなければならぬのです。しかも、縄張面積の大小にかかわらず、繁殖期には三日間でその約八十%を歩き回っていたのです。あるメスと一緒に連れ添っていたかと思うとやおら、もう一頭のメスのところへ足早に移動していく様子は、本当にご苦労様という感じでした。

### 同志社香里生物部との共同研究

生物部の生徒と一緒に、捕まえて、標本にしても怒られない動物を相手にしようと考え、手つけたのが、水生昆虫の調査でした。川の好きな生徒がいたので、生徒もとつきやすかったようでした。

淀川水系の桂川とその支流の清滝川、鴨川上流の貴船川、宇治川とその支流の志津川及び池尾川と、いろいろな川へ調査に行きましたが、大きな川では汚いことが多く、あまり多くの虫は採集できませんでした。夏合宿で行った東吉野村の四郷川と高見川の合流地点では、二十八種採集できましたが、淀川水系では、四〜十種しか採集できませんでした（一九八八〜一九九〇年の調査）。きれいな場所の周年変化を調べようと貴船へ毎月のように調査に行きましたが、水量が少なく、種数も十種しか採集できませんでした。また、水生昆虫の種の同定には顕微鏡観察が必要で、これが私も含め生物部のやる気をそいでいったのです。

そんな一九九一年の秋の日、高雄の紅葉を見に行くと、そこを流れる清滝川にカワムツがうようよと泳いでいました。これはいい所を見つけたと、早速「清滝川総合調査計画」を作成しました。魚類の調査では、カワムツを捕まえてマークし、放流してどこに分散していくのかを調べようと思いました。しかし、カワムツは、数が多いが捕まえることが難しく、

捕獲方法を確立するのに三〜四か月かかりました。一九九一年十二月〜九二年六月までに、三十二匹捕獲し、二十八匹にマークして放流しました。九三年十二月〜九四年五月の間に、百十三匹捕獲し、五十八匹にマークして放流しました。マークしたものは、体長十cm以上の大きなものだけだったにもかかわらず、全く再捕獲されずに三年が過ぎてしまいました。夏のアユ釣りの時期に調査できなかったのも、痛手でしたが、これからどうしようかと悩んでいた時に出会ったのが、サンシヨウウオでした。

それまでオオサンシヨウウオしか知らなかった我々が、ヒダサンシヨウウオやハコネサンシヨウウオの存在を知り、居場所まで教えてもらったのです。すぐに行動を起こし、十一月にはハコネの幼生を採集し、翌三月にはヒダの卵囊十個と成体二匹を採集し、飼育を始めました。ハコネは幼生時代はエラ呼吸をするが、上陸して幼体になるとエラがなくなり、しかも肺が形成されないので皮膚呼吸しかできなくなるといふ、飼育の難しい種です。ヒダは、小さいままエラのない幼

体に変態するので、大きな成体にまで育てるのが難しいそうです。現在ハコネは幼体になり少し大きくなりましたし、卵から育てたヒダは途中で多くの個体が干からびて死んでいきましたが、何とか二匹が生き残っています。ヒダの成体はミズやナメクジなどをよく食べても元気です。

現在絶滅の危機にあるカスミサンシヨウウオの京都・大阪の個体群についても、野外調査を始めたところです。学研都市の造成で棲息場所がずいぶん少なくなつたようですが、西日本を代表する止水性のサンシヨウウオを幻のものにしてはならないと思います。

これと並行して、現在学校にいるセミについても、抜け殻から個体数の調査をし、土中の幼虫についても掘り出してその様子の研究を始めたところです。

色々やってきましたが、やはり生態学はおもしろい。これからも、この学校の生物を記録し、野外調査を続け、生物部の生徒と研究を続けていきたいと思えます。